

分科会5A

## 読み聞かせ講座

### (A) 小さい子向け

たのしいおはなし会をもつために  
～子ども読書活動交流集会（実技編）～

講師：坂本 由紀子（児童図書館研究会  
会員 元公共図書館司書）

分科会5の読み聞かせ講座は、小さい子向けの(A)、大きい子向けの(B)の二つの講座に分かれて実施しました。

(A)小さい子向けの講座では、前半部分で、乳幼児期における読み聞かせの大切さについて、お話いただきました。

インターネットやケータイ小説が流行る昨今、何故本なのか？ 乳幼児にとって、読書は「耳」からの体験である。子どもと本の間には手渡し人がある。手渡し人があるからこそ、子どもはドキドキ、ワクワクしながら本の世界に入っていける。そこは広くて、奥深く、子どもだけでなく大人も一緒に楽しめる世界が待っている。

子どもが人間として健全に成長していくとはどういうことなのか、そのためには何が必要なのか？ それは、自分の言葉をもつということ、自分で考えられるようになるということ。そのためには「言葉」による体験をたくさん重ねることがとても大事。大人が話しかけなければ、子どもたちに言葉は蓄積されない。言葉を投げかけてくれる大人が身近にいることが、いかに子どもの成長にとって大切なことなのか、改めて認識する必要がある。

幼少期の子どもたちとのコミュニケーションにおいて、絵本とわらべうたは“素晴らしい道具”になる。小さい子への読み聞かせでは、絵本と紙芝居のバランスを考えることも

大事。それぞれの違いを知って手渡すこと。紙芝居は会話体で主人公が枠から外にどんどん飛び出してくるので、臨場感があり、共感しやすい。一方、絵本は読み手をとおして、聞き手が想像を働かせて絵本の世界に積極的に入って行くもの。より能動的になる。子どもたちがおはなしに食いついてきたらシメたもの。すでにそれぞれの子どもたちの頭の中に絵本の世界が作られはじめている。だから、むやみに絵本を大型化する必要などなく、絵本のもつ力を信じて読んでやろう。

乳幼児が社会性をもって振舞えるようになるには3歳後半ぐらいまで待たなければならない。赤ちゃんにとって、絵本という物体はまだ「本」ではない。かじったり、なめたり、やぶったり、ぬり絵をしたり……。でも、母親のお膝に持っていくと、ページを開いて読んでくれるもの。乳児期は絵本によって身の回りにあるものをひとつひとつ確かめていく時期でもある。絵本の中に自分の知っているものが出てきた時はうれしくなって反応する。だから、自動車を指差して「ブーブー、ブーブー」と言ったら、「そう、ブーブーだね」と応えてやることはとても大切なこと。また、乳児期に限らず、絵本の読み聞かせは子どもたちとのスキンシップ等、関係性をとりながら行うことが大事。たべもの絵本を読む時、おいしそうなたべものが出てきたら一人一人に「さあ、どうぞ」という言葉かけをすると、子どもたちは自分にやってくれることのうれしさを感じ取ってくれる。



続いて、後半部分では、読み聞かせにおける本の選び方、読み方の技術等について実践例をもとにお話しいただきました。

読書は本来個人的な行為であり、家庭における読み聞かせには一対一の暖かさがある。大人数が相手のおはなし会は、こうしたことと矛盾しないのか、という問いかけがある。しかし、友だちと一緒におはなしを聞く楽しさ、友だちが自分と違ったところに反応したりするのを知る驚き等、おはなし会にはまた違った良さがある。

#### ■おはなし会で読む本を選ぶときの留意点

##### 1. funny より interesting であること

『三びきのやぎのがらがらどん』を例に、最近出版されたしかけ絵本とオリジナル本を比較した時のある生徒の感想・・・

「しかけ絵本は funny だが、  
オリジナル本は interesting だ。」

##### 2. 「定番」の本とくり返しの楽しさ

一昔前なら誰もが知っている絵本を読んでもらったことのない子どもが増えている。子どもから「その本、知ってる」と言われてもガッカリしないこと。むしろ、子どもたちが知っている本のほうが効果がある（話に食いついてくる）。

##### 3. 組み合わせを考える

子どもの集中力は持続しないため、全部「定番」だと子どもは疲れる。中心になる本をたいせつにしながらか成する。

##### 4. 2, 3歳にわたせる本はそう多くない

赤ちゃん絵本とわらべうたを効果的に組み合わせる。

#### ■おはなし会で本を読むときの留意点

##### 1. ゆっくり 素直に 心をこめて

子どもの関心が本に向けられるように読むこと。ややもすると、本の内容よりも読み手のアクションの方が印象に残ってしまう

ことがある。

##### 2. 事前の準備が必要

あらかじめ読んで練習をしておくこと。また、本に開きぐせをつけておく。ページが安定しないと話が揺れる。落丁等も事前に確認する。ページをめくった時、購入時についていたハガキ等が落ちたりすることがないように。

##### 3. 場所の確認

事前におはなし会のイメージを想定できる。

##### 4. 読む速さとめくる速さ

めくった最初は一呼吸。子どもの興味が新しいページの絵に向けられている時、すぐに読み始めると言葉とがちあってしまう。

##### 5. 聞き手の様子を把握する

読み聞かせを始めて間もないうちは、本を読むことだけに神経が集中してしまいがち。聞き手の様子を把握しながら読むこと。グズったり、騒いだりする子がいる時、会場内に一緒になって話に引き込んでくれるスタッフがいると助かることが多い。

##### 6. 読みっぱなしが原則

読み終えた後、子どもたちに感想を求めない。「どう？面白かった？」「どんな感想をもったか聞かせて」等は禁句。

##### 7. 求められればくり返し読んでやろう

講義の終盤には、参加者による読み聞かせの実演を交えながら、終了時刻をオーバーするほど熱心にお話しいただきました。